

# みなみく いらぶ 南区(伊良部) 佐和田・長浜・国仲・仲地・伊良部



南区(伊良部)には、北から、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の5つの字があり、「漁業の佐良浜」に対し、「農業の伊良部」といわれるほど、広大な農地が広がっています。

歴史の中で初めて伊良部島の名が登場した「朝鮮王朝実録」によると、1477年に与那国島へ漂着した済州島民が、島伝いに本国へ送還される途中で伊良部島を訪れます。藍染の苧麻の衣服をまとい、大麦を中心に、黍、粟、稻などを栽培し、米麹を用いた酒を作っていたと、当時の島の様子がくわしく記録されています。

## サトウキビと島

南区の農業の中心はサトウキビです。冬の製糖期になると、ケーンハーベスターがうなりをあげてサトウキビを収穫する様子は、とても迫力があります。家族総出でサトウキビ畑へ繰り出し、一本一本手作業でサトウキビを刈ってゆく風景は、今では少なくなっています。



## 下地島と空港

細長い入り江を隔てて伊良部島と隣り合う下地島は、とても平坦な島で、古くから耕作地として利用され、伊良部島と一体となった農業が行われています。

そんな下地島に、戦後、本土復帰を前に、パイロット訓練施設を軸とした空港



建設計画が持ち上がり、建設の是非を巡る議論が、島を二分する騒動となりました。1971(昭和46)年、日本政府と当時の屋良朝苗琉球政府行政主席との間に交わされた「屋良覚書」によって、現在も平和的な利用が促されています。

下地島空港は1979(昭和54)年に大規模空港並みの3000mの滑走路を有する国内唯一のパイロット訓練施設として開港して以来、「イラブブルー」の海上を飛ぶ航空機の写真で一躍有名になり、航空マニアのみならず、観光スポットとして高い人気を博しました。

現在、実機による訓練は減りましたが、2019(平成31)年の新旅客ターミナル開業に伴い、国内外の定期便が就航しています。

みなみく  
いらぶ  
南区(伊良部) 佐和田・長浜・国仲・仲地・伊良部

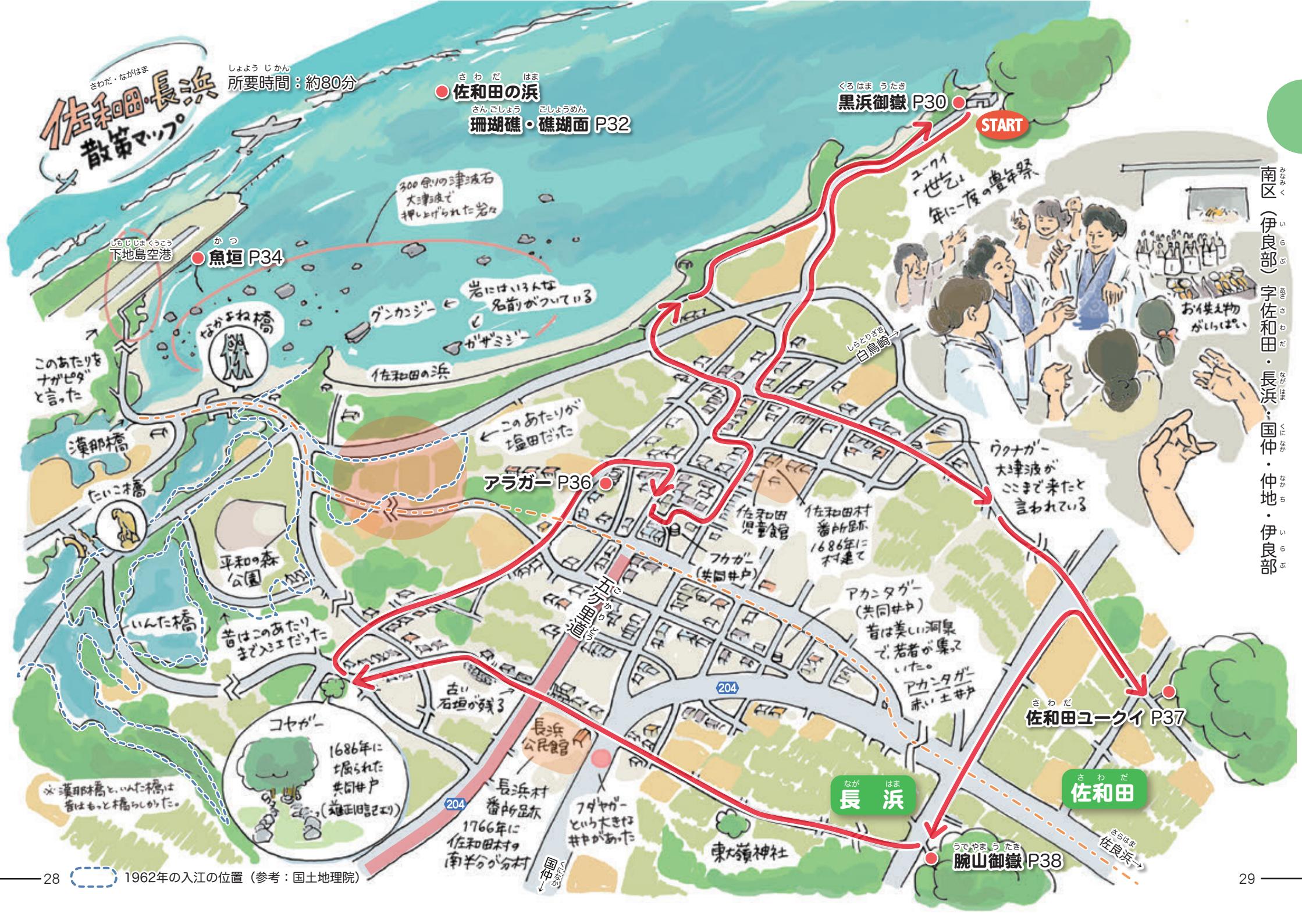


# いりえ しゅうらく 入江と集落

伊良部島と下地島の間は「入江」と呼ばれる細長い海で隔てられており、その海を渡るために6つの橋が架けられています。下地島空港の建設に伴って架けられた乗瀬橋を除く5つの橋は、それぞれの集落と下地島を結んでいます。集落の中心である村番所から、農地として利用されてきた下地島へのメインストリートのようになっており、当時の歴史をうかがうことができます。

また、複雑に入り組んだ地形を持つ入江は、生活の近代化に伴って一部は埋め立てられてしましましたが、いまも多種多様な動植物が棲み、古くから人々に恩恵をもたらしてきました。





## 黒浜御嶽



この御嶽は村建ての伝説を持ち、兄妹産子神を祀っています。旧暦六月の酉の日に行われる「六月願い」は、佐和田、長浜に生まれた女のいや、黒浜御嶽にお願いをして子宝に恵まれた夫婦が、毎年参加する習わしがあります。

この日は、旅に出ている人の無事を海に向かって祈る「ポカオサギ願い」も行ないます。



1994(平成6)年6月25日指定

むら だ はなし  
村建てのお話

むかし てん かみさま けいまい うぶ こ がみ  
昔、天の神様が兄妹の産子神を  
黒浜の地に降ろし、人間をたくさん  
作るよう言いました。

ところが兄妹の最初の子どもは  
ブフズ(雑魚)でした。2番目の子  
どもはアパ(オコゼ)で、3番目の  
子どもはウナズ(海蛇)だったの  
で、みな海へ還しました。



ふたりは悲しんで神様に相談する  
と、「夜、ユナの葉をふたりの間に  
置いて寝なさい」と教わりました。

そのとおりに暮らしていると、よ  
うやく、4番目に人間の子どもが誕  
生しました。こうしてたくさんの子  
どもを作り、村ができました。

参考: 伊良部村史(1978)

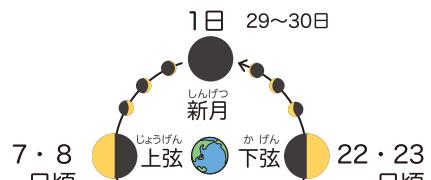
きゅうれき えと  
旧暦と干支

## 旧暦とは

月の満ち欠けと太陽の運行をもとに作られた「太陰太陽暦」のこと。日本では、1872(明治5)年まで「天保暦」が使われていました。昔からの風習や、行事の多くはこの旧暦に従って行われています。

えと  
干支とは

「十干」と「十二支」を組み合わせ、60を周期とした数詞で、暦や時間、方位などに用いられます。



7・8 日頃 15・16日頃 22・23 日頃

1日 29~30日

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12.  
甲子 乙丑 丙寅 丁卯 戊辰 己巳 庚午 辛未 壬申 癸酉 甲戌 乙亥

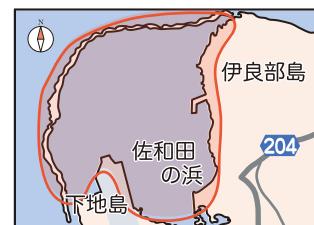
13. 14. 15. ...  
丙子 丁丑 戊寅 丙寅 丁卯 丙辰 丙午 丙申 丙戌 丙亥  
子ね 丑し 寅と 卯 辰と 巳 未と 午 未と 申と 酉と 戌と 亥と  
... 58. 59. 60. ...  
辛酉 壬戌 癸亥

60の組み合わせが終わったらまた始めにもどる  
それぞれの干支には、「子」は子孫繁榮・財、  
「午」は豊作・健康といった意味がある。

さわだ はまさんごしょう しょうこめん  
佐和田の浜珊瑚礁・礁湖面

佐和田の浜は「日本の渚百選」にも選ばれた礁湖です。浅瀬に点在する300余りの岩々は、大津波で打ち上げられたと言わわれています。潮が引くと内海潟原と呼ばれる干潟が現れ、干満によっていろいろな姿を見ることができ、特に水平線に沈む夕日は格別です。

遠浅の湾は様々な生き物が棲み、昔から優れた漁場として島の人々の生活を支えてきました。



## さまざま珊瑚礁

## 岩礁



## 堡礁



## 環礁



## 礁湖



ビーチのすぐ近くに発達したサンゴ礁のことで、宮古島では吉野海岸や新城海岸などで観察でき、県内でもよく見られる形状。

地殻変動や海面上昇で陸地が沈んだとともに、岩礁が成長を続けてできた、陸地から離れた場所にあるサンゴ礁のこと。佐和田の浜の礁湖を囲むサンゴ礁は、これに分類される。

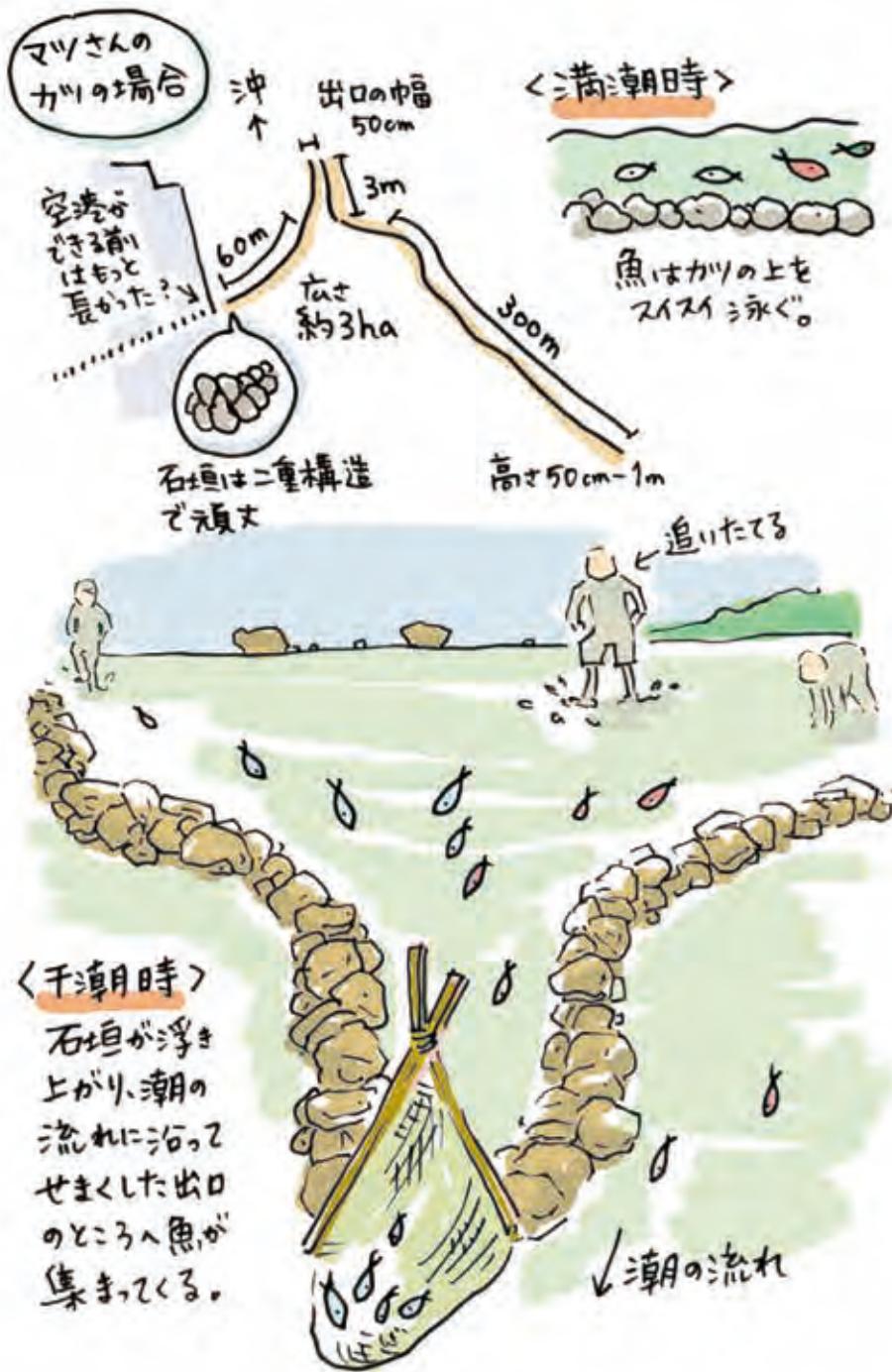
堡礁の中の陸地がすべて沈み、環状のサンゴ礁になったもの。南太平洋に多く見られ、キリバスやマーシャルなど、環礁が陸地化して人が暮らしている島もある。

一般にラグーンと呼ばれ、堡礁や環礁によって外洋と隔てられた内海のこと。波浪の影響を受けてなく、海面が湖のように穏やかなのが特徴。岩礁の場合は海の面積が狭いことから、礁池と呼ばれる。

かつ  
魚垣

遠浅の海に積み上げられた石垣を「魚垣」といい、潮の満ち引きをうまく利用した伝統の漁法で、かつては7カ所もの魚垣がありました。現在は下地島空港の滑走路東側にひとつだけ残され、保存されています。

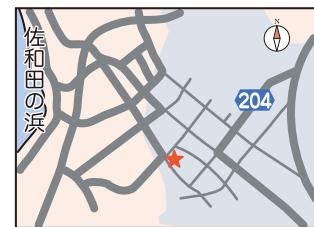
この魚垣は、1850年頃に善平マツさんによって造られたと言われています。



## アラガー



佐和田集落の西側にあるアラガーは、佐和田井とも呼ばれ、集落が形成される元となった古い井戸です。昔、このあたり一帯は広大な雑木林で、その林に鳩がしきりに出入りしていることから、湧き水を見つけたという伝承があり、「鳩の見つけ井戸」とも呼ばれています。井戸の構造は湧き水の縁を石で囲った簡単なもので、15世紀頃、集落の繁栄に伴って現在の形に改修されました。



## 佐和田ユークイ (嵩原御嶽)



※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入らないようにしましょう

佐和田のユークイが行われる嵩原御嶽には、「大世の主」が祭神として祀られています。「大世の主」は1457年に沖永良部島から漂着した人々のひとりで、大竹中洞穴で仮暮らしをしていました。やがて水を求めて南へ移動し、黒浜に流れ着いた八重山の人々と集落を作り、農耕技術や礼法などを指導して村を発展させました。その功績により尊敬を集め、「大世の主」と呼ばれるようになりました。



## 腕山御嶽



※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入らないようにしましょう

長浜にある腕山御嶽は、「ユークイ」など多くの祭祀が行われます。「ユークイ」とは豊年祭のこと、「ユー」は豊かな世、「クイ」は乞うを意味しています。長浜をはじめとした伊良部、仲地、国仲で行われているユークイは、比屋地御嶽に祀られている「あからともかね」が祭神ですが、佐和田ユークイでは「大世の主」が祭神となっており、集落のルーツの違いを知ることができます。



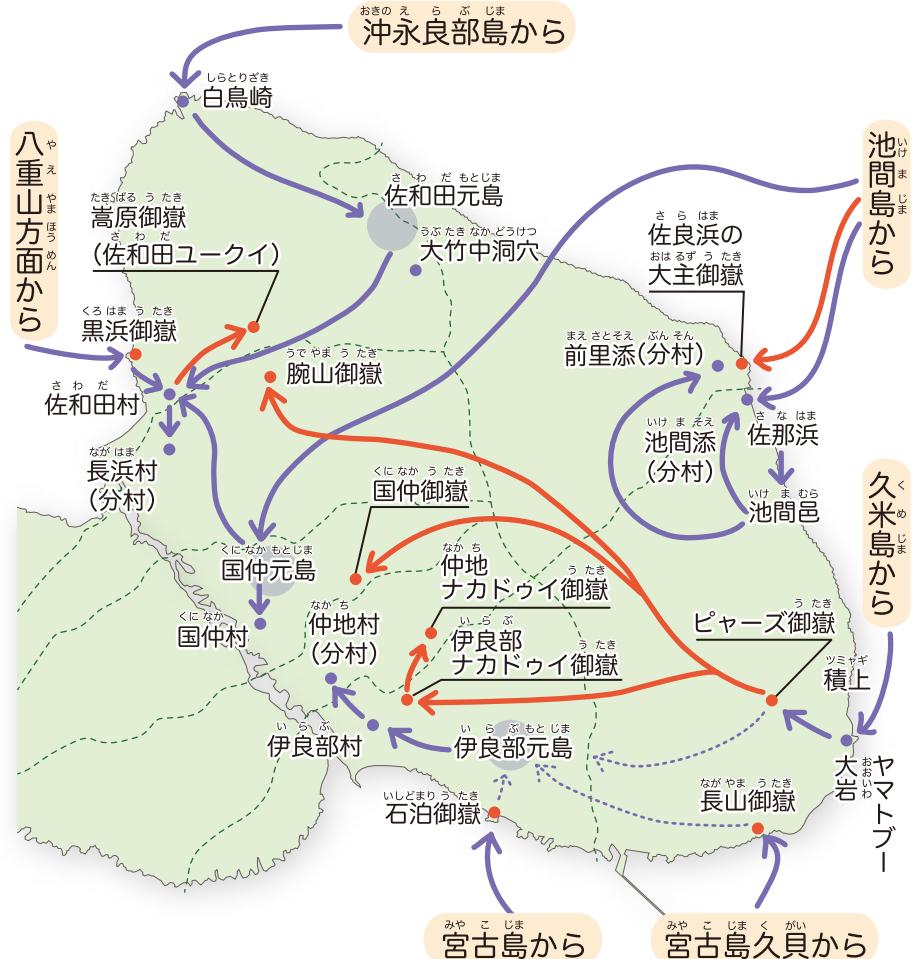
## しま 島のルーツを探れ！

しま

さく

島のルーツを探れ！

ひとびと なが  
人々の流れ  
ひとびと すいそく  
人々の流れ（推測）  
さいしん  
祭神の流れ



参考:『正保の国絵図』(1646)/『伊良部村史』(1978)

ナカドウイ??  
(中通=中取)

遠くまで行かなく  
ても祭事が行える  
ようにした御嶽

ナカドウイの  
祭神は、  
本神と同等で  
分祀や分神  
に近い。

うぶ たき なか どう けつ  
大竹中洞穴

洞穴は約文字型をした広い陥没ドリーネの崖面にあり、ここからはミヤコノロジカや人の歯の化石も見つかっています。広々とした底面にはオオクサボクの群落をはじめ、さまざまな植生を見ることができます。

伝承によると、この洞穴には沖永良部島から流れ着いた人々が住んでいたとされ、この地域にとって重要な場所といえます。



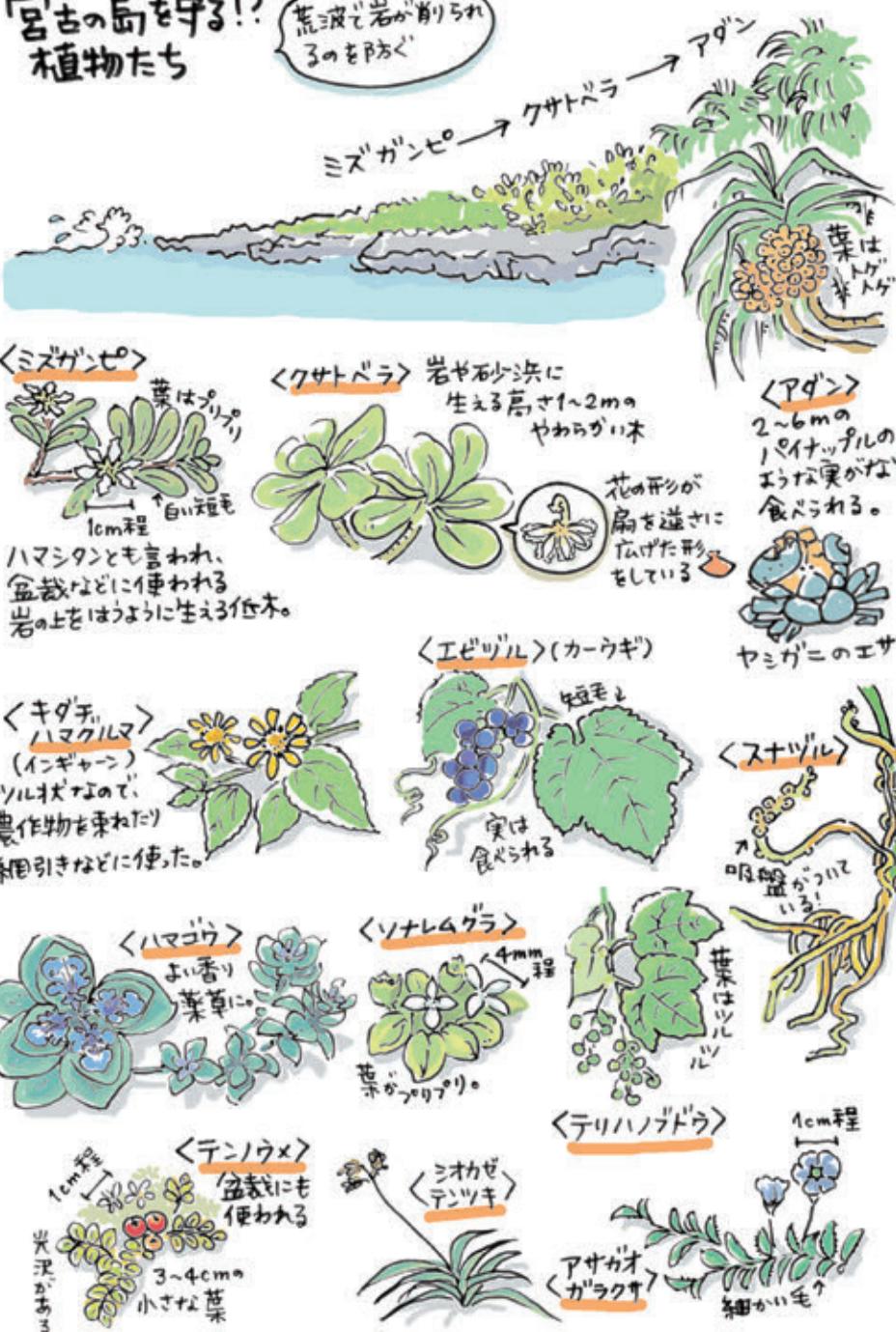
しら とり さき がん しょう かい がん ち いき  
白鳥崎岩礁海岸地域

い ら ぶ じま ほくせい ぶ い ち  
伊良部島の北西部に位置するこの海岸地域は、風化や浸蝕  
つ く あら あら やく まん  
によって作られた荒々しい岩礁地帯です。約200~600万年  
まえ しつ ちが りゅうきゅうせっ かい がん ち ひょう あらわ  
前にできた質の違う琉球石灰岩が地表に現れており、色や岩  
はだ かん さつ  
肌などの違いを観察することができます。

げん ざい しゅう へん にし かい がん こう えん  
現在、白鳥崎周辺は西海岸公園と  
あ ねっ たい とく ゆう せいしょく ぶつ  
なっており、亜熱帯特有の岩礁性植物  
かず おお み  
を数多く見ることができます。

宮古の島を守る?  
植物たち

荒波で岩が削られ  
るのを防ぐ



南区  
(伊良部)  
佐和田・長浜

# 下地島の通り池

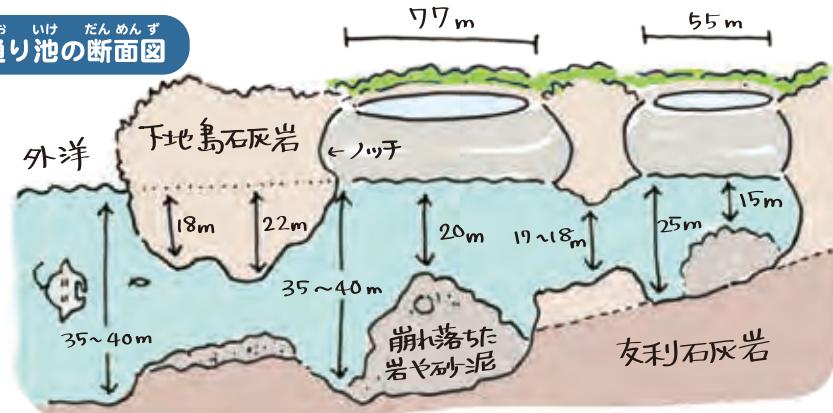


下地島の西海岸に位置する通り池は、幅50mを超すふたつの縦穴で、地下で海と通じています。石灰岩が浸食され、天井部分が崩れ落ちた鍾乳洞(陥没ドリーネ)と、波に削られてできた海蝕洞とが繋がってできているこの不思議な地形は、地質、地形学的にも貴重です。

また、海中の神秘的な形状は、ダイビングスポットとしても人気があります。



## 通り池の断面図



参考：『宮古島市総合博物館紀要 第18号』安谷屋昭(2014)

### 通り池ができるまで



### 継子伝説

昔、下地島に妻に先立たれ、息子と暮らす漁師がありました。やがて再婚をし、3人は仲良く暮らし始めましたが、子どもが生まれると、継母は前の妻の子を疎ましく思うようになりました。

ある日、継母は兄弟を通り池に連れていく、兄をツルツルした岩場に、自分の子である弟をゴツゴツした岩場に寝かせました。そしてその夜、継母はツルツルした岩場に寝ていた子を池に突き落とし、残った子を背負って一目散に

家へと走り出しました。ところが、背負っていた子が「弟はどうしたの？」と尋ねるのです。兄は、岩がゴツゴツして眠れないという弟と場所を交代していました。間違って我が子を殺したこと気がついた継母は、背中の子を放り出すと、そのまま自分も通り池に飛び込んで命を絶ってしまいました。

今でも池のそばには「継子台」と言われる岩が残っています。

参考：『伊良部村史』(1978)

# 下地島巨岩



崖の上にあるこの巨岩は、外径 59.9m、高さ 12.5m、重さ 2  
万トンと推定され、津波石とも呼ばれています。過去の大津波  
で打ち上げられたと考えられ、自然災害のスケールの大きさを  
感じることができます。こうした巨岩は数多くありましたが、  
空港建設に伴って取り除かれ、今はひとつだけ残されています。岩の中央がくび  
れているため「オコスクビジー」(帯を締  
めた大岩)、「帯岩」と呼ばれています。



# でんせつ く かえ お よ こだいおおつなみあかし ヨナタマ伝説～繰り返し押し寄せた古代大津波の証～

むかし しも じ じま き どまり むら  
昔、下地島に木泊という村があり  
ました。ある晩、村の漁師が上半  
身は人間、下半身は魚という、摩  
訶不思議なヨナタマという大きな  
魚を釣り上げました。珍しがった  
漁師は、翌日、村のみんなと食べ  
ることにしました。

よる おそ となり いえ こ  
その夜遅く、漁師の隣の家の子  
い ら ぶ じま い な  
どもが「伊良部島に行こう」と泣  
だ  
き出し、どんなになだめても泣き  
や  
止みません。母親が子どもを抱い  
そと で おき ほう  
て外に出ると、沖の方から「ヨナ  
タマ。ヨナタマ。お前はどこにい  
る? はや りとうぐう もど  
る? 早く竜宮に戻っておいで」と  
い げん み こえ ひび  
威厳に満ちた声が響いてきました。  
おう むすめ  
それは竜宮の王が娘のヨナタマ  
しん ぱい よ  
を心配して呼ぶ声でした。漁師の

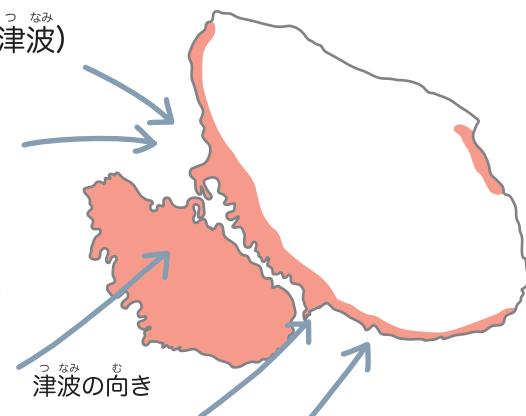
家に捕らえられていたヨナタマは、  
とうさま わたし ころ  
「お父様、私はもうすぐ殺されます。  
はや おお なみ おく たす  
早く大波を送って助けてください」  
ごた き  
と応えました。それを聞いた母親  
こわ いそ いつ しょ  
は怖くなり、急いで子どもと一緒に  
に に  
に伊良部島へ逃げました。しばらく  
お よ しまじゅう  
すると大波が押し寄せ、島中の  
ありとあらゆるものを洗い流して  
あら なが  
しまいました。

いのち　い　の  
命からがら逃げて生き延びた親  
ひ　ひ  
子が大波の引いた村に戻ってみる  
じ　ふん  
と、漁師の家と自分の家があった  
ところ　ある  
所には、大きな穴があき、ふたつ  
い　い　い　い　い  
の池ができました。  
とき　ある　とお  
この時にできた穴が、「通り池」  
い  
だと言われています。

参考：『宮古島記事仕次』(1748)

けんりゅうさんじゅうろくねん おおなみ めいわ おおつなみ  
乾隆三十六年大波(明和の大津波)

きゅううれき  
1771(明和8)年、旧暦の3月  
10日前、マグニチュード7.4の  
地震が発生し、宮古・八重山諸島  
へ大津波が来襲。宮古諸島では  
2,461名の死者が出たと古文書  
(「思明氏家譜」付属文書)に記さ  
れています。



参考：『伊良部村史』(1978)